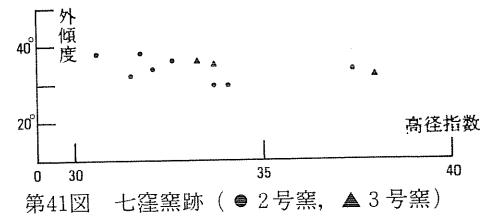


## 1 横手盆地の須恵器窯

横手盆地の古窯跡は第17表のとおり現在まで11箇所知られている。このうち須恵器窯出土と報告されている土器について観察し、編年作業を試みることにする。

### (1) 七窪窯跡 (第44図)

概要 本窯跡の窯体構造は半地下式窯窯である。報告書によれば4基の窯跡が見つかっている。2号1次窯・2次窯・3号窯出土土器は時間差の少ない同一時期の所産とみなされている。挿図

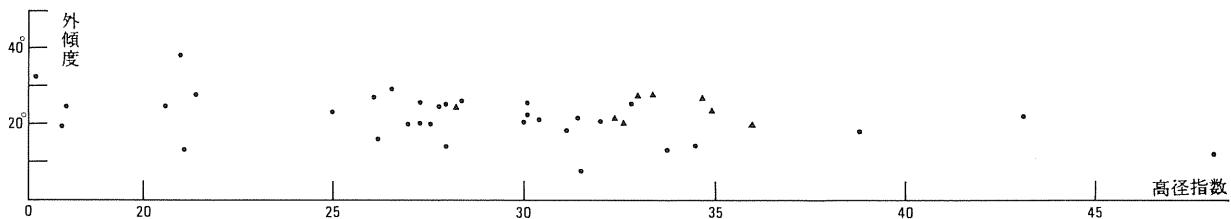


第41図 七窪窯跡 (● 2号窯, ▲ 3号窯)

分類 法量により分類すると、第41図のようになる。I類 (601~609) 高径指数30.6~34.1、口径12.6~14.2cm、外傾度29~38°。II類 (610~611) 高径指数37.4~38、口径12.3~12.9cm、外傾度33~34°。このほか広口瓶(612)は口頸部に粘土紐を貼りつけた隆帯をもつ。甕(613~614)の口縁部形態は同様なものが多い。

### (2) 末館I窯跡 (第45・46・48図)

概要 本窯跡の窯体構造は半地下式窯窯である。報告書によれば出土遺物は窯底面に密着して発見されている。第45・46図に掲げた土器は報告書挿図の複写である。須恵器は杯・蓋・甕などがある。杯類土器を法量により分類すると次のようになる。I類 (615~617) 高径指数17.2~18、口径13.3~14.2cm、外傾度19~33°。II類 (618~621) 高径指数20.6~21.4、口径8.4~13.8cm、外傾度13~38°。III類 (622~630) 高径指数25~28.4、口径9.7~13.2cm、外傾度14~29°。IV類 (631~639) 高径指数30~36、口径9.7~12.4cm、外傾度7.5~28°。V類 (640~642) 高径指数38.8~49.1、口径8.1~10cm、外傾度12~22°。高台杯(643~648)、蓋(649~651)、壺(652~654)、甕(655~658)は頸部に2・3段の波状文が施されている。



第42図 末館窯跡 (● I号窯, ▲ II号窯)

第48図（674～684）は雄物川町郷土資料館に展示されているもので今回実測したものである。須恵器は杯・高台杯・蓋がある。杯類土器の底面のロクロからの切り離し技法は、回転ヘラ切りである。杯は体部と底部面との境界が丸味もつもの（674・678）、体部下端に回転ヘラケズリをもつもの（675）、底部から二次底部面を介して体部へ至るもの（676・677）に分けられる。法量により分類すれば、III類（674～676）、IV類（677・678）となる。高台杯（679～682）681は体部中央に丸味をもつ把手が付くようである。蓋は扁平で中くぼみをもち擬宝珠形の貼り付けつまみをもつもの（683）と宝珠形のつまみをもつもの（684）とがあり、いずれにも天井部外面2分の1ほど回転ヘラケズリ調整をもち、口縁部端は小さく下方に折り曲げている。

雄物川町郷土  
資料館の展示  
資料

### （3）末館II窯跡（第47・48図）

本窯跡の窯体構造は、半地下式窯窯である。報告書によれば焚口の下方から多量の須恵器が発見されている。挿図に掲げた土器は報告書挿図の複写である。須恵器の器種には杯・高台杯・高台鉢・盤・蓋・長頸壺などがある。杯類土器を高径指数による法量により分類すると次のようになる。なお、分類は末館I窯跡に準ずる。III類（659）とIV類（660～665）に分けられる。蓋は、すべてリング状つまみがつくようである。

概要  
分類

第48図（685～689）は雄物川町郷土資料館に展示されているもので、今回実測したものである。杯（685）は底面の切り離しは回転ヘラ切りで、体外面から底面にかけて回転ヘラケズリのちナデ調整を施している。蓋はリング状に粘土紐を貼り付けたつまみをもち、全体に扁平なもの（686・687）と丸味のある天井部から口縁に至るもの（688）があり、いずれも天井部外面に回転ヘラケズリ調整をもつ。長頸壺（689）は全体に風化が激しく、とくに体部上半が著しい。頸部は接合する際の粘土の粒子が上下に動いた痕跡がみえる。体部上半はカキ目のあとナデ、下半は横方向のケズリ痕跡がみえ、底面の切り離しは回転ヘラ切りで高台がつく。

末館I・II窯跡は至近距離にあり、同一の古窯跡群を形成していたと考えてよいと思う。末館古窯跡群杯類土器を高径指数と外傾度によって大きく5群に分けてみた。本窯跡出土土器の特徴は、I・II群の外傾度の差が大きく、III・IV群の外傾度は7～29°までバラつきをもつが、20～30°の間に集中する傾向がある。V群は比較的小形で深い器形をとるものである。末館II窯跡の杯はIV群に多く、蓋の形態差は末館I窯とは相違しているので、多少の時間差を考えねばならない。とくに、長頸壺（689）は頸部から肩部の張りぐあいなどからみると、かなり下がるように見える。

### （4）西ヶ沢窯跡（第50図）

本窯跡の窯体構造は、半地下式窯窯である。報告書によれば、燃焼部落ち込み下層より、概要

要

須恵器がみつかっている。須恵器は杯・甕がある。杯の底面の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りがあるが、量比は不明であり、無調整のようである。杯の高径指数による法量分類は、高径指数25.9～27.8、口径13.8～13.9cm、外傾度が35～36°である。この法量は郷土館窯III類や成沢窯の組成に近い様相であるが、回転糸切りが多いのが異なるようである。

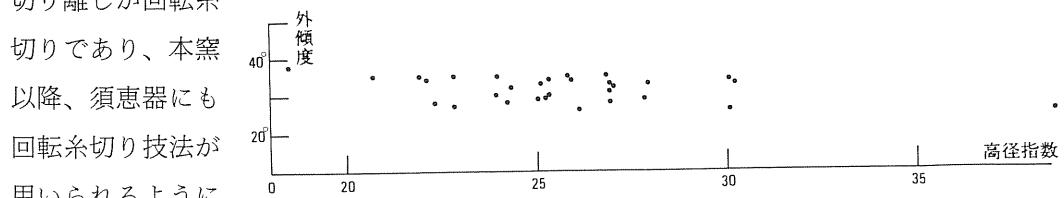
## (5) 竹原窯跡 (第50図)

概要 本窯跡の窯体構造は、半地下式窯窯のようである。出土遺物は窯燃焼部から須恵器の杯・高台杯・蓋・甕と円面硯などがある。杯類土器の底面切り離しはすべて回転ヘラ切りである。杯(703)は、体部下端に回転ヘラケズリ調整をもつ。法量は高径指数31.2、口径14.4cm、外傾度33.5°である。

## (6) 郷土館窯跡 (第51図)

概要 本窯跡の窯体構造は、半地下式窯窯である。報告書によれば、遺物は窯本体内と灰原から須恵器がみつかっている。須恵器の器種には杯・高台杯・蓋・壺などがある。杯類土器を高径指数による法量によって次のように分類できる。I類(707)高径指数27、口径14cm、外傾度38°。II類(708～713)高径指数20.7～22.8、口径13.4～14.1cm、外傾度27～35°。III類(714～734)高径指数23.9～27.9、口径11.9～14cm、外傾度26～35°。IV類(735～737)高径指数30.1～30.9、口径10.6～12.6cm、外傾度26～34°。V類(738)高径指数38.5、口径11.4cm、外傾度25°。杯はロクロ成形で無調整である。ロクロ切り離しが、回転ヘラ切り(707～735)と回転糸切り(736～738)に分けられる。調整技法は、体部と底部面との境界が丸味をもつもの、底部から二次底部面を介して体部へ至るもの、底部と体部との境界がはっきりしているものなどが見られる。蓋は天井部外面に回転ヘラケズリ調整をもち、口縁部端は小さく「く」字形に折り曲げているもの(739)、断面「S」字形のようなもの(740)などがある。

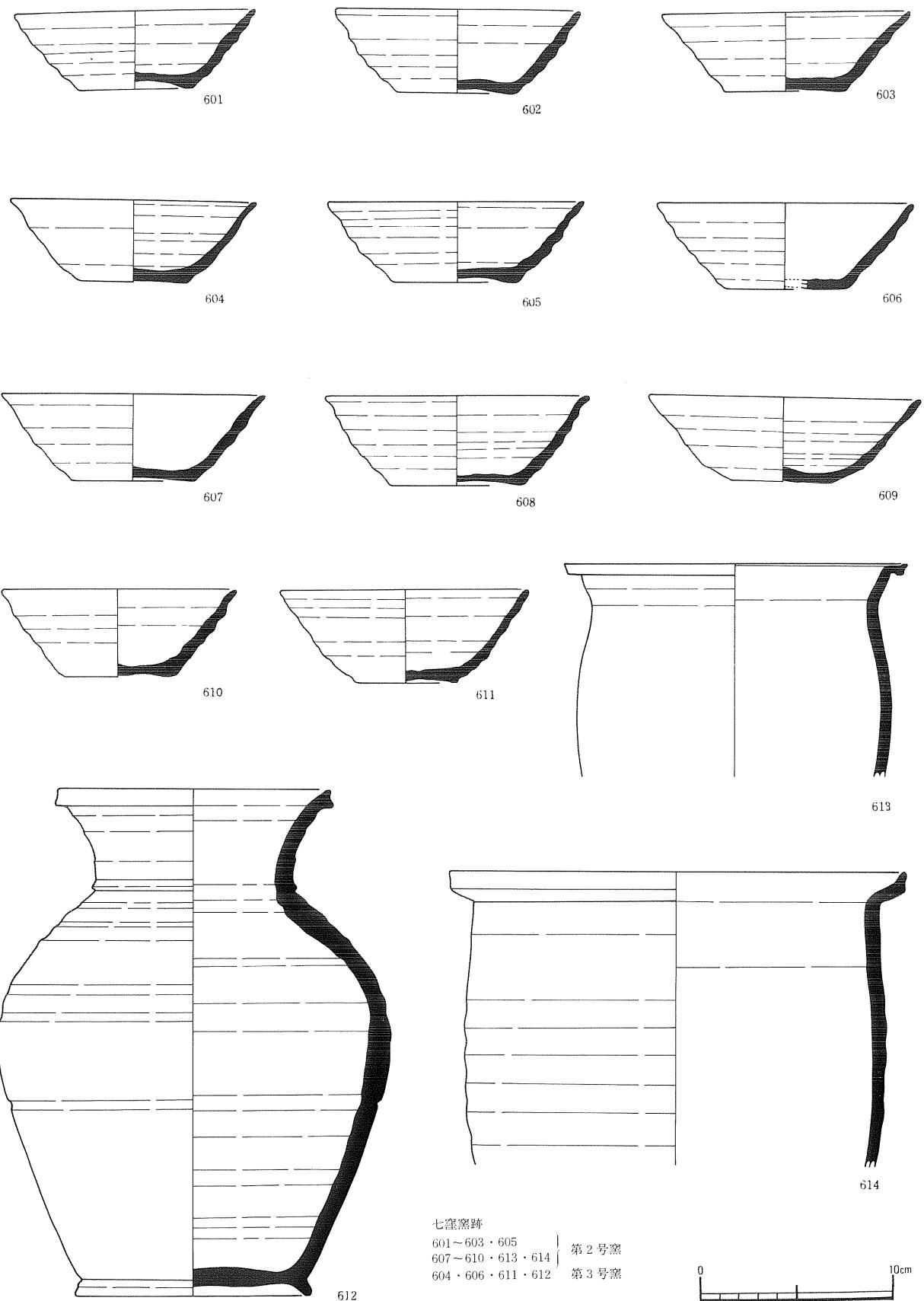
特徴 郷土館窯跡の須恵器杯は第43図のように法量から大きく5群に分けてみた。本窯跡出土土器の特徴は高径指数が20～30間に、外傾度も25～35°間に集中する傾向をもち、これは末館I・II窯跡や物見窯と著しい相違である。第IV・V類とした4個のうち3個が、底面の切り離しが回転糸



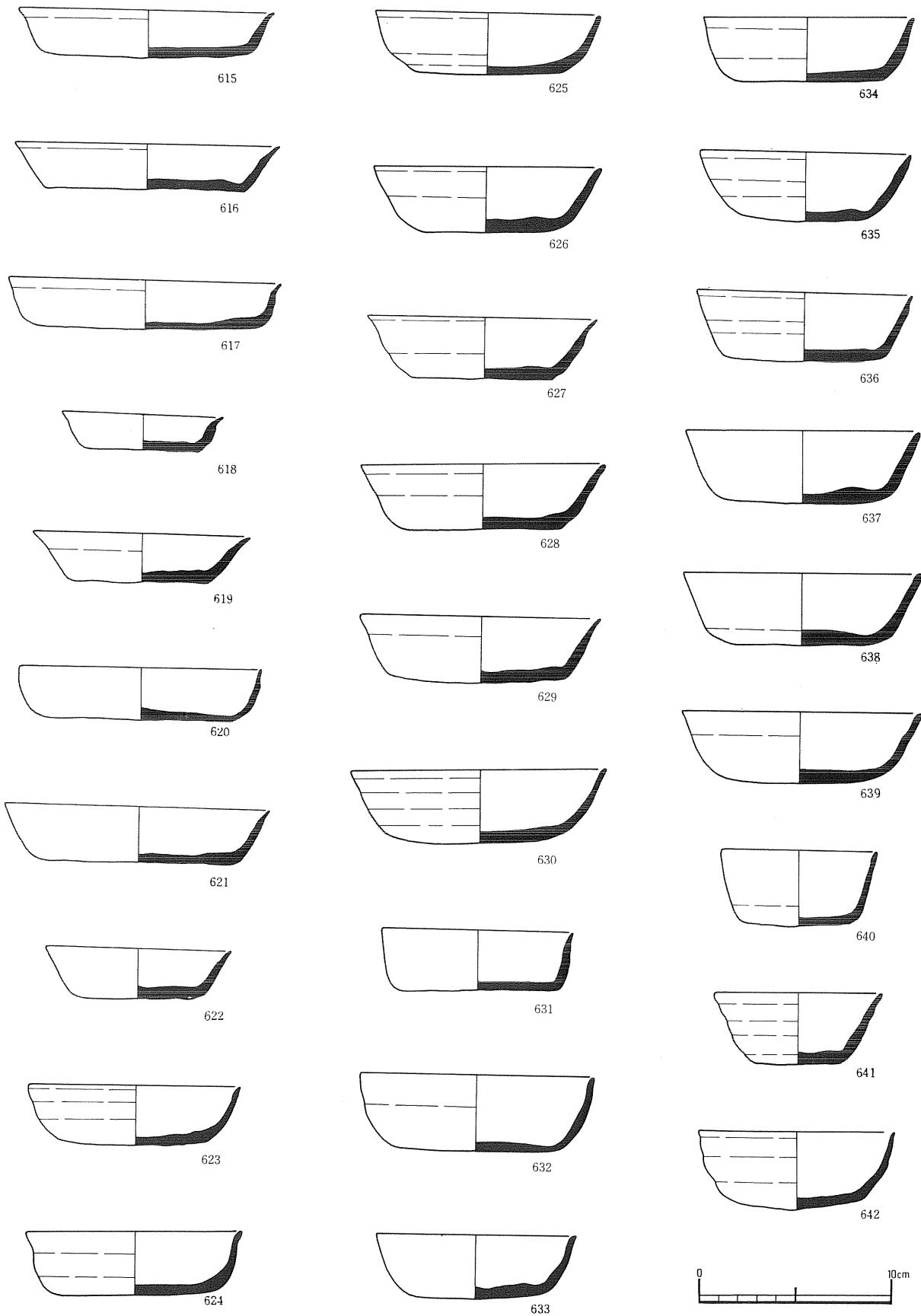
第43図 郷土館窯跡

なると考えられる。

第2節 遺物

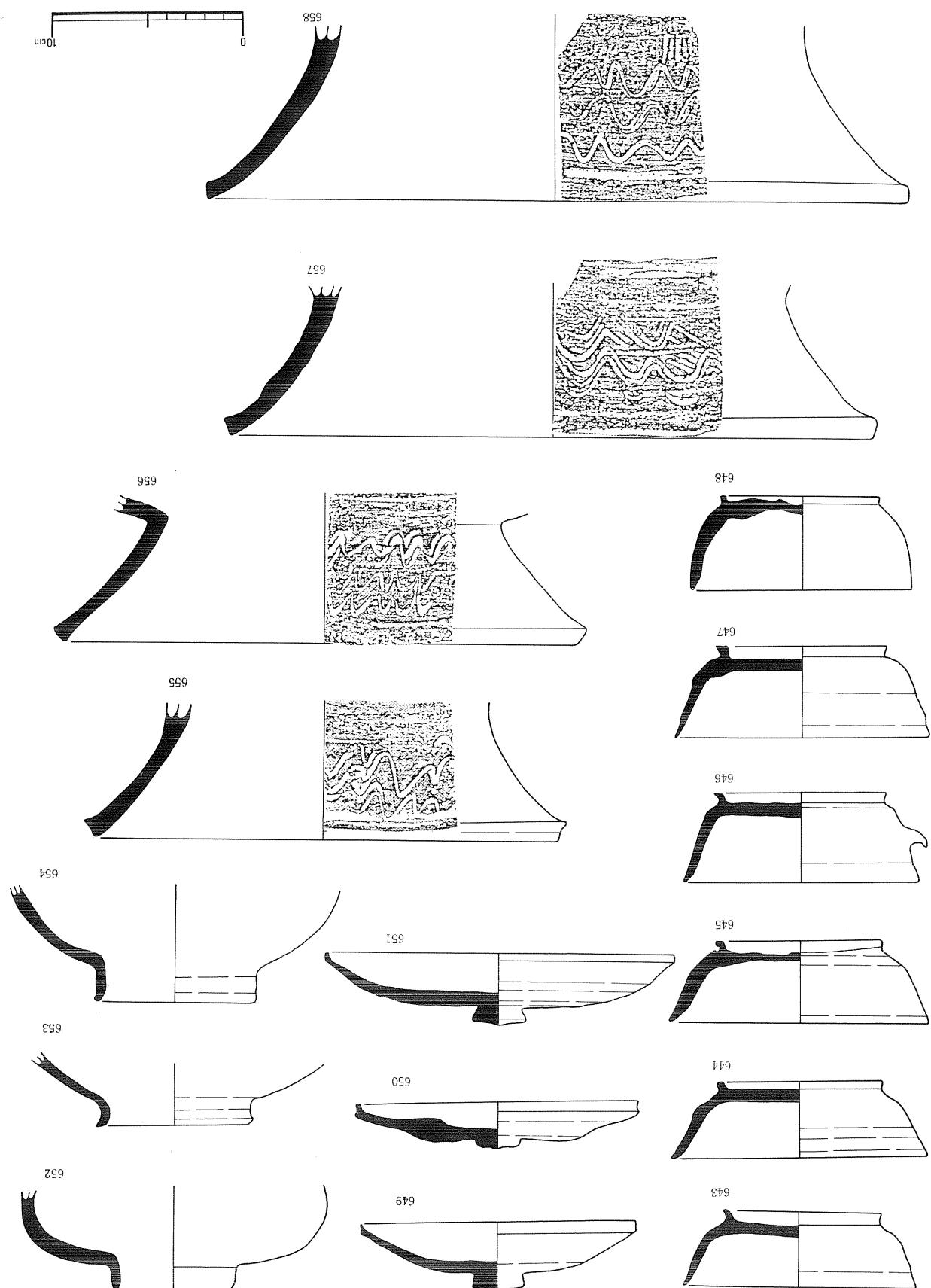


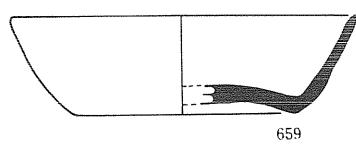
第44図 七窯窯跡出土土器



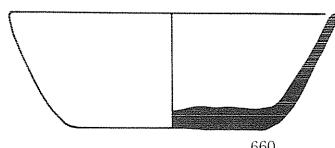
第45図 末館窯跡出土土器(1)

第46图 末梢器皿出土土器(2)

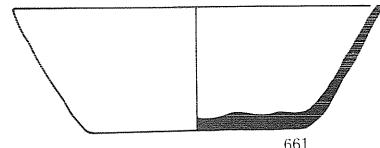




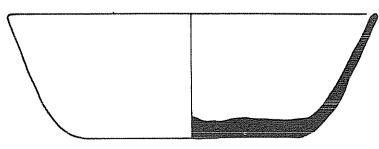
659



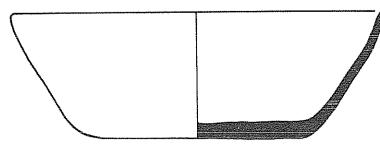
660



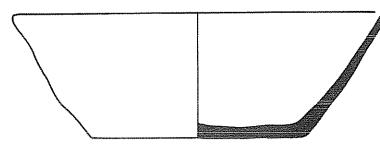
661



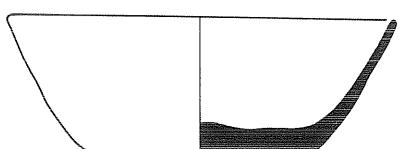
662



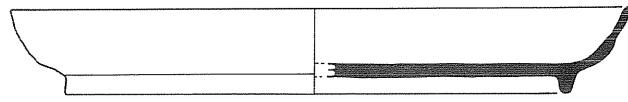
663



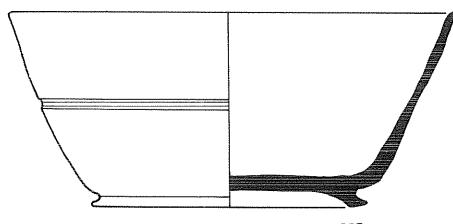
664



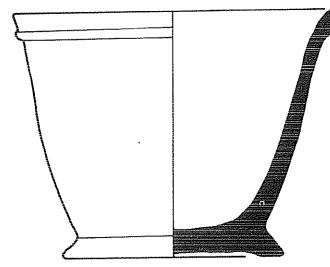
665



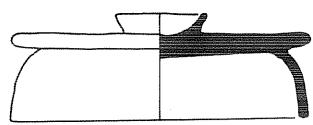
666



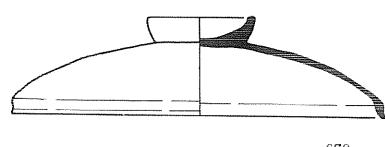
667



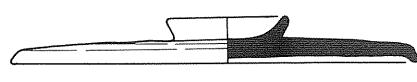
668



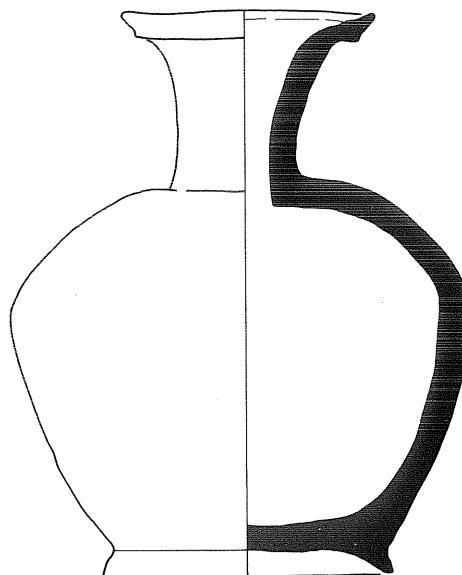
669



670



671



673

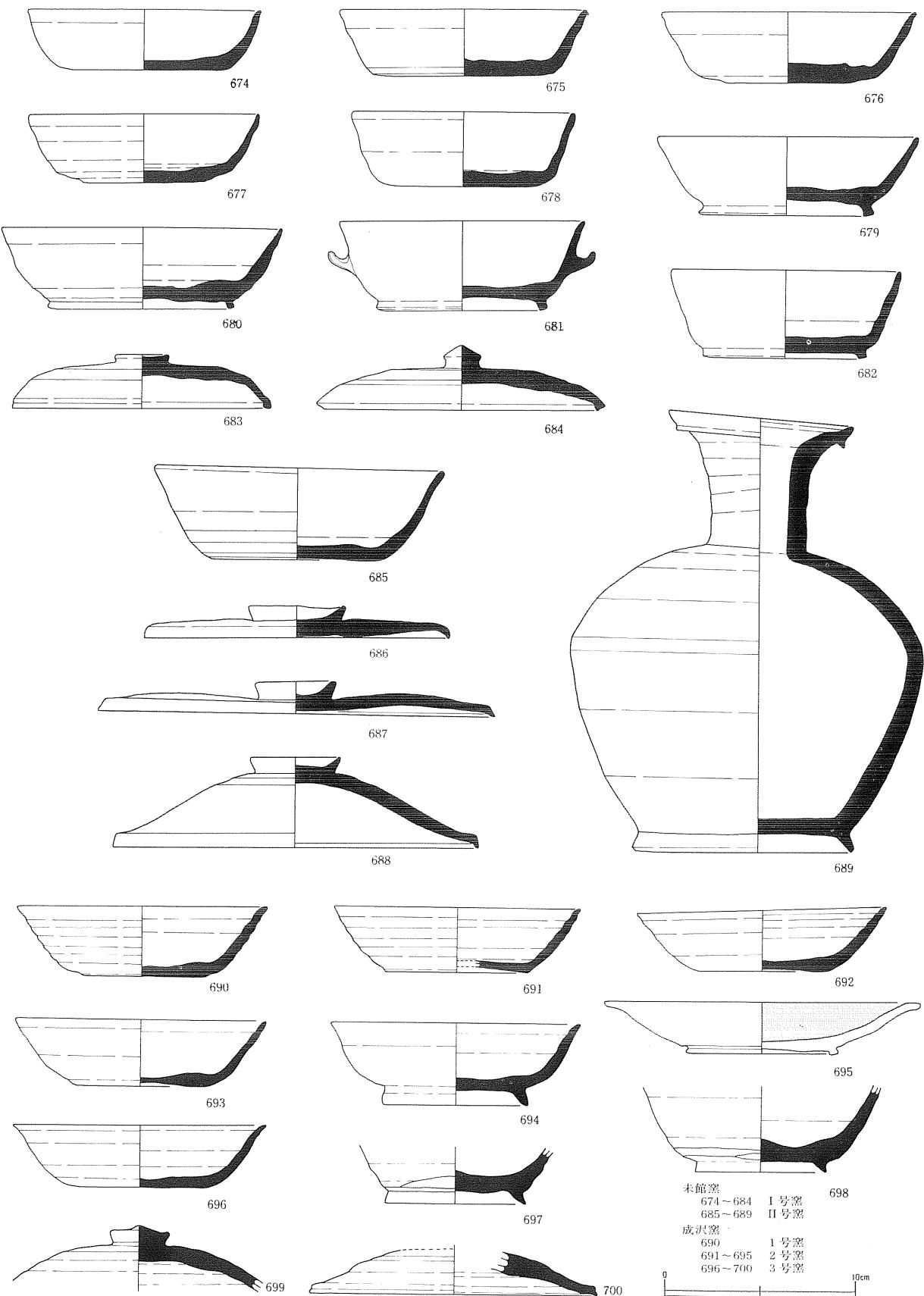


672



第47図 末館窯跡出土土器(3)

## 第2節 遺物

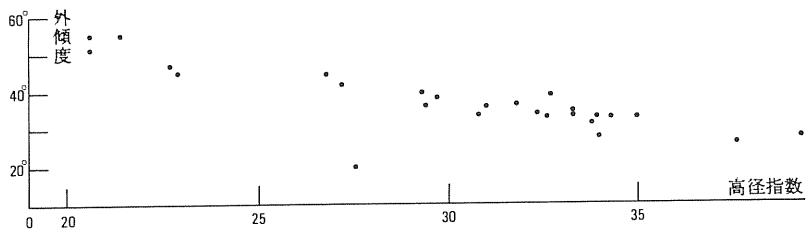


第48図 未館窯跡出土土器(4)・成沢窯跡出土土器

## (7) 物見窯跡

概

要 本窯跡の窯体構  
造の特徴は、焚口  
に扁平な河原石を  
置き、燃焼部側壁  
にも石を用い天井



第49図 物見窯跡

分

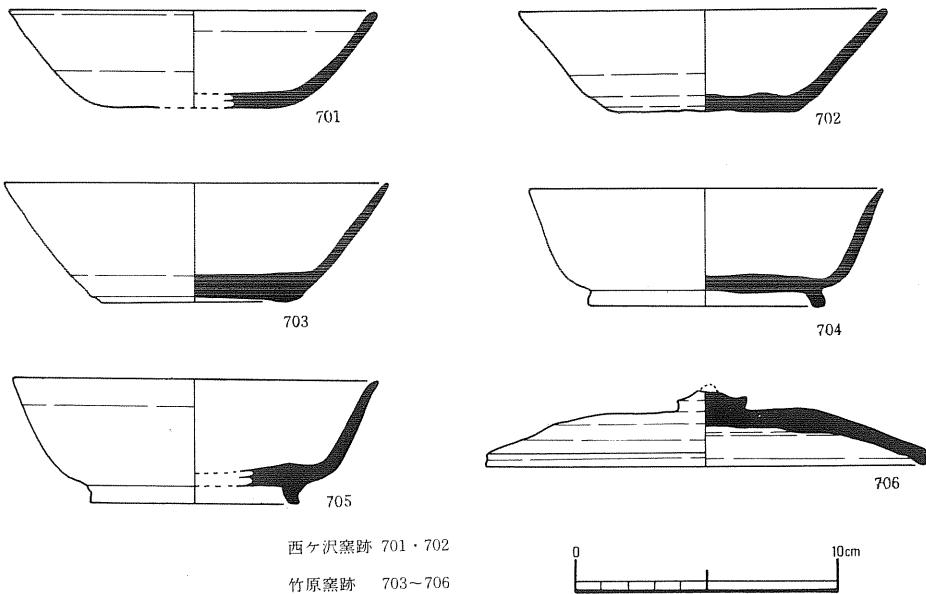
類 法量によって分類すると次のようになる。I類 (741~745) 高径指数20.6~22.9、口径  
12.6~14cm、外傾度45~55°。II A類 (746) 高径指数27.5、口径9.8cm、外傾度20°。II B類  
(747~750) 高径指数26.8~29.6、口径12.8~13.2cm、外傾度36~44°。III類 (751~764)  
高径指数30.8~35、口径13.2~14.2cm、外傾度28~39°。IV類 (765・766) 高径指数  
37.6~39.3、口径12.5~12.7cm、外傾度26~28°。甕(767)は長胴で底部は丸底、タタキ痕  
跡をもつものが多いようである。

概

要 本窯跡出土土器の特徴は次のようになる。I類としたものは皿で、従来なかった器種で  
ある。主体となる杯はIII類で高径指数30~35の間にあり、外傾度も30~40°の間に集中する  
特徴がみられる。

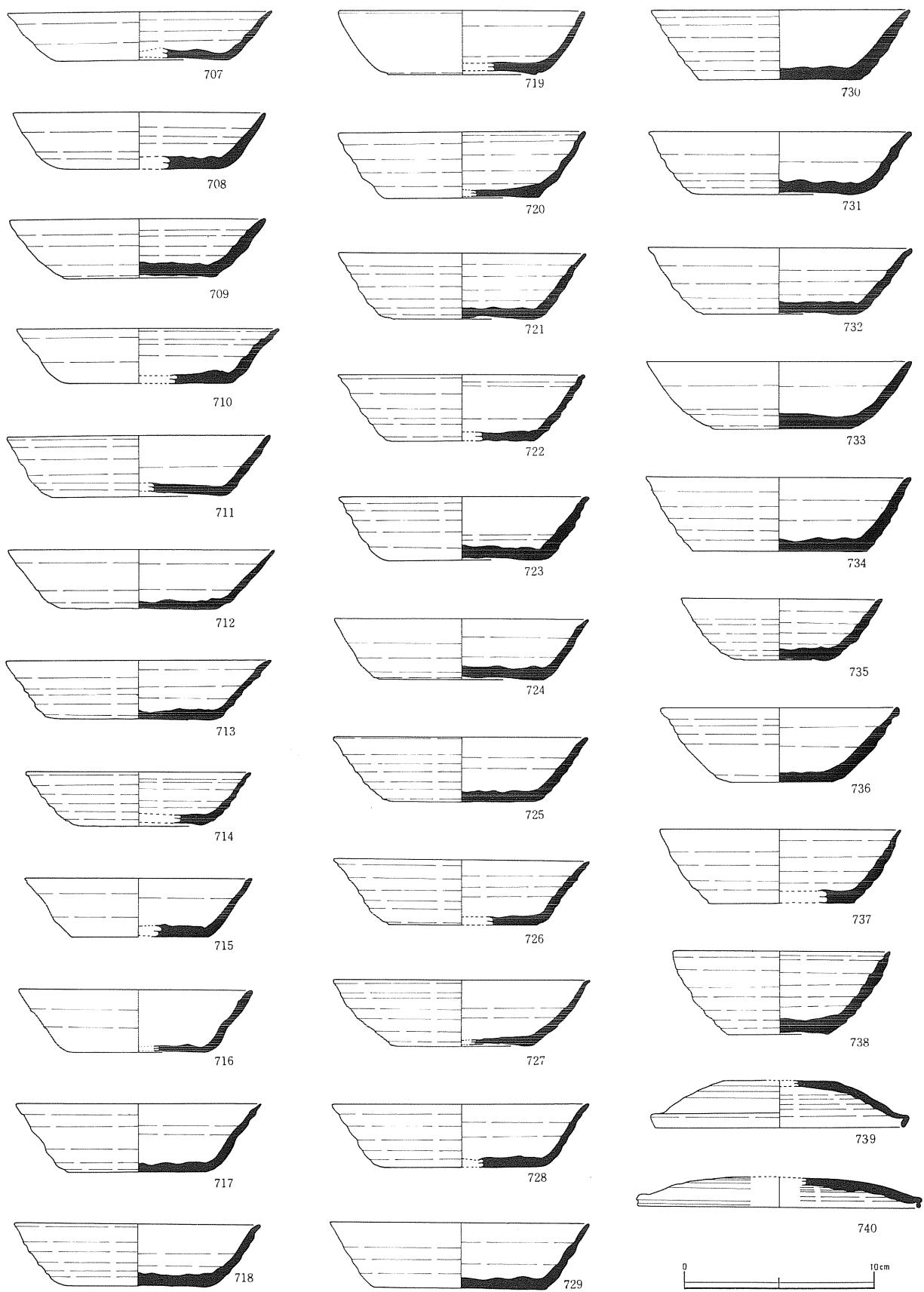
## (8) 成沢窯跡 (第48図)

本窯跡の窯体構造は半地下式窯窯である。報告書によれば、窯は3基以上あり、3号→

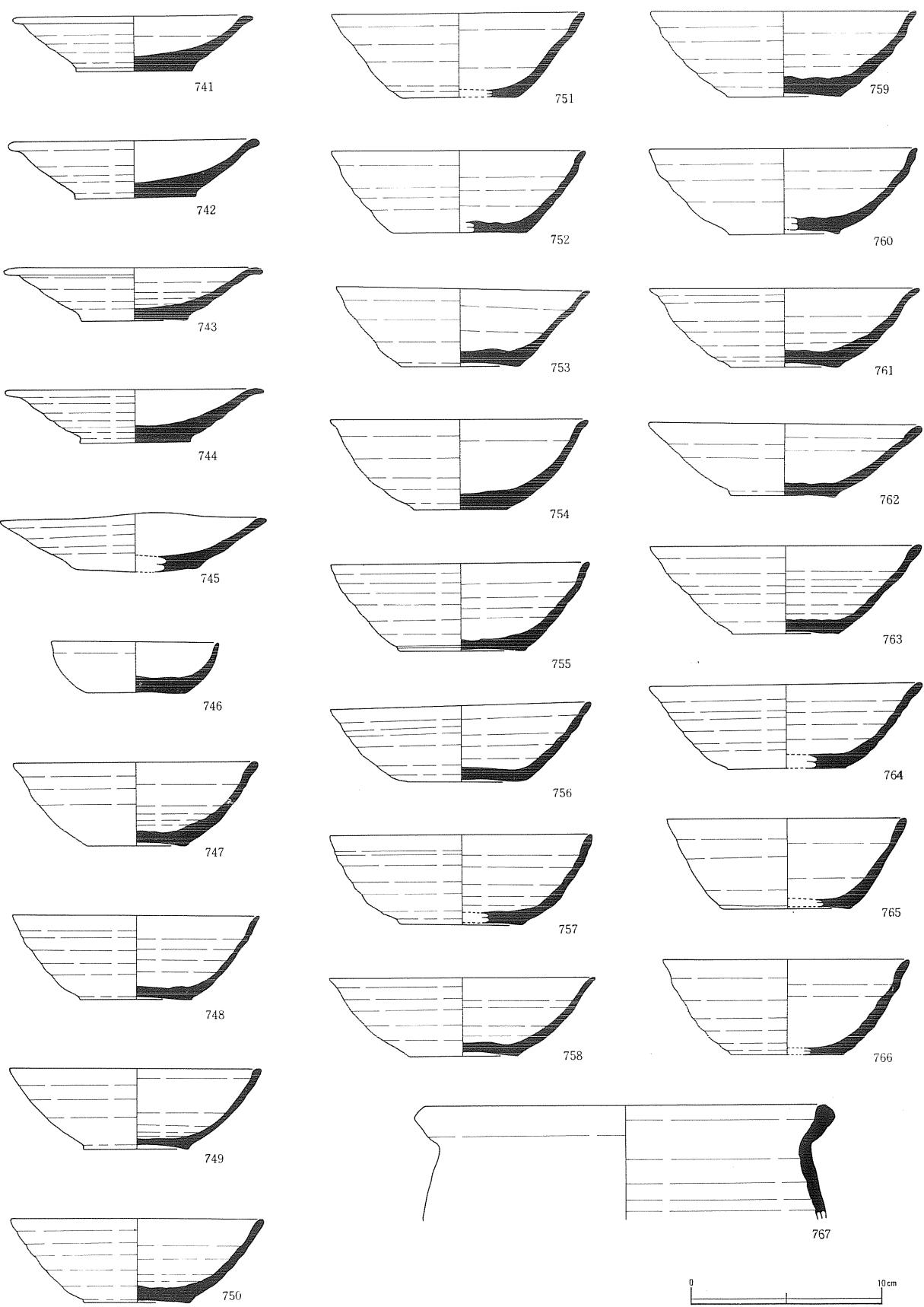


第50図 西ヶ沢窯・竹原窯跡出土土器

第2節 遺物

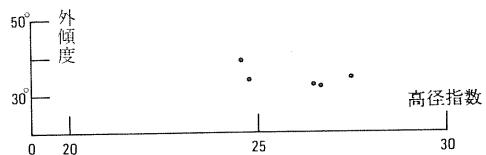


第51図 郷土館窯跡出土土器



第52図 物見窯跡出土土器

1・2号の順に構築されたとされている。ここでは、大きな時間差がないものとして、一括に扱う。須恵器は杯・高台杯であり、土師器は杯・高台皿・甕などがある。須恵器の杯は回転ヘラ切りで無調整である。土師器の杯は、回転糸切りで無調整であり、内面黒色処理の破片もある。須恵器の杯を高径指数による法量によつて分類すると、高径指数24.6~27.5、口径12.7~13.3cm、外傾度32~39°に集中する。高台杯は体部下端に回転ヘラケズリ調整をもつもの(697・698)ともたないもの(694)がある。この回転ヘラケズリ調整は、高台を付す際に予定面を平滑にするためにおこなつたものであろう。蓋は宝珠形のつまみをもち天井部外面に回転ヘラケズリをもち、口縁部端を下方に折り曲げている。2号窯体内から内面黒色処理した土師器高台皿(695)が出土している。高台皿は内面にヘラミガキ調整をおこない、底面の切り離しは回転糸切りである。高台を貼り付ける際にヘラ状工具で強く押えた痕跡がみえる。成沢窯の須恵器杯は、郷土館窯第III類に近い指数をもつが、外傾度は30~40°に集中し底径指数が小さくなることがわかる。このように郷土館窯と同一法量をもつものであつても、年代的には新しい要素をもつてゐることを示している。また、窯体内から内面黒色処理された土師器(杯・高台皿)があり、すべて回転糸切りをもつことに注目しておきたい。



第53図 成沢窯跡

		高径指数25~35間に外傾度	杯の底面の切り離し技法および調整技法	その他の特徴
I	末館 I・II 窯	外傾度 7~29°間にあるが20~30°間に集中する	すべて回転ヘラ切り、体部下端を回転ヘラケズリの調整あり	III・IV類が主体で高径指数25~35間に集中する
II	郷土館窯	外傾度26~35°間にあるが30~35°間に集中する	32点中3点だけ回転糸切りで他はすべて回転ヘラ切りである 回転ヘラケズリの調整あり	II・III類が主体で高径指数20~30前後に集中する
III	物見窯	外傾度28~44°の間にあるが30~40°間に集中する	すべて回転糸切り 無調整	II・III類が主体で高径指数29~35間に集中する IIIが焼かれている

第18表 須恵器窯比較表

## (9) 須恵器の特徴と段階

古窯跡の出土遺物について、概観したわけであるが、一群を調査した窯体数が少なく、出土遺物の内容も乏しい。この中でも比較的内容のある末館I・II窯、郷土館窯、物見窯の出土の杯類土器を取り出して比較検討をおこなってみた。

前頁に示された各窯の特徴は時間差を示すものととらえ、それぞれを以下『末館窯土器段階』『郷土館窯土器段階』『物見窯土器段階』と呼称することにする。

## 末館窯土器段階

『末館窯土器段階』は末館I・II窯跡だけである。末館II窯跡の蓋のリング状のつまみは、鳥屋三角田南跡出土のリング状つまみと類似している。「宮城県内を中心としたリング状つまみを焼成している窯跡は8世紀初頭から降っても8世紀中頃に位置づけられ、陶邑古窯跡群における出現時期と大差ないもの」というのが、現時点の一般的な位置づけであろう。ただし、秋田県では、本窯のリング状つまみと形態を異にするが手形山2号窯から、ツバ付リング状つまみが出土し、9世紀中葉の年代が与えられている。また、末館II窯跡と伝えられる長頸壺(673・689)は、肩の張りがなく、最大幅が体部中央になり8世紀末から9世紀初頭の年代であり出土地点に疑問をもっている。したがって、『末館窯土器段階』は8世紀中葉に操業年代の盛行期をおくが、8世紀末まで継続していたことが想定されるであろう。

『末館窯土器段階』とは木戸窯跡群、日の出山窯跡群A地点、鳥屋窯跡群の系譜をもつ末館窯跡の土器をもってあることにする。本段階は8世紀中葉を中心とし、8世紀後葉を次段階の移行期と位置づけておきたい。

## 郷土館窯土器段階

『郷土館窯土器段階』には、竹原窯、郷土館窯、成沢窯跡群、西ヶ沢窯などが入るであろう。竹原窯は公表されている資料が少ないため、正確を期しがたいが、末館窯と郷土館窯の中間に位置する可能性が大きいと思われる。成沢窯跡群は、郷土館窯の杯類土器の法量比から年代は新しい要素をもっていることと、2号窯体内から出土した内黒土師器の高台皿を9世紀中葉の年代としておきたい。本窯出土の須恵器杯類土器はすべて回転ヘラ切りであり回転ヘラケズリ調整をもつものもある。この技法を考慮すれば、9世紀中葉の範囲を出ないが、もう少し古く位置づけてもよいかもしれない。郷土館窯が、成沢窯と比較して古式と思える要素は底径指数の大きいものや、外傾度の小さいものが多いことである。しかし、郷土館窯の須恵器IV・V群土器に回転糸切りが導入されているが、成沢窯では内黒土師器に回転糸切り痕があるのが顕著な違いである。これらから、本窯跡は8世紀末から9世紀初頭に位置づけておきたい。

『郷土館窯土器段階』は、8世紀後葉が前段階との移行期であり、9世紀前葉を盛行期ととらえ9世紀中葉までの操業期間となる。したがって、9世紀中葉から後葉にわたる時間が、次段階の移行期と位置づけておきたい。

## 物見窯土器段階

『物見窯土器段階』には、七窯窯跡群、物見窯跡などが入るであろう。本段階の杯類土器は回転糸切りで、無調整である。七窯窯跡群は前段階までの窯式と同様な窯窓であるが、

物見窯は焚口部（送風部）があり天井部構造をもつ平窯である。窯式からみれば、七窯が古く、物見が新しいという年代の前後関係が成立つ。七窯窯跡群では小形品である杯類だけでなく、瓶・甕など大形品もある。物見窯は小形品が多いが丸底のタタキのある甕もある。したがって本段階では小形品だけでなく、大形品も依然として焼成したものであろう。年代の手がかりはないに等しい。

遠距離になるが、山形県東置賜郡川西町にある道伝遺跡から出土した寛平8年（896）の木簡が伴なったS D01の4層上と4層下の土器群をみてみる。4層上面からは須恵器の杯が4点、高台皿が1点、両黒・内黒土師器の高台杯3点などがある。須恵器・土師器ともに回転糸切りである。4層下面の須恵器杯は回転糸切り5、回転ヘラ切り1、不明1である。これらの土器の高径指数と外傾度は、物見窯III類と七窯窯I類と重なる範囲が大きいことがわかった。このような観察から、9世紀末から10世紀初頭の土器は、底部の切り離しは回転ヘラ切りから回転糸切りにほぼ移行しており、杯類土器の組成も『郷土館窯土器段階』から『物見窯土器段階』に移っている様相を示しているようである。したがって『物見窯土器段階』は9世紀後葉が前段階との接点であり、10世紀前半までの期間が操業期間となろう。

## 道伝遺跡

## 2 横手盆地の古代土器

横手盆地における奈良・平安時代の集落遺跡出土土器のなかで、発掘調査による良好な資料となると、きわめて少ない。遺構内出土土器であっても、同一時期を確定する床面出土資料となると、さらに僅少である。ここでは、古墳時代から奈良・平安時代の資料を紹介し、発掘調査によって遺構内出土と判断された一括資料を取上げて、年代比定を試みることにする。

### （1）横手市オホン清水遺跡（第56図）

遺跡は横手市塚掘字オホン清水にある。<sup>（註8）</sup>秋田県では最も古い須恵器（834）が出土している。短脚の有蓋高杯で、脚部の3箇所にある長方形の透しは配置が不均整である。おそらく、5世紀末・6世紀初頭の製品であろう。

概要

### （2）上野遺跡（第56図）

遺跡は大曲市高関上郷字上野にある。水田開墾中の出土品で、同一期の可能性が大きい。概要土師器・杯（835）は非ロクロで黒色処理されていない。体部全体が丸味をもつ丸底であり、口唇部が小さく外反するように挽き出されている。口縁部外面はナデ、体部はケズリ